

主日礼拝説教

1987年5月10日

神戸聖ミカエル大聖堂

昨日初めて日本に参りました私にとりまして、本日ここで説教いたしますことは最初の仕事になりますので、まず我々の主イエス・キリストの名においてご挨拶申し上げ、英国聖公会からの親善の気持ちをお伝えすることから初めたいと思います。

皆さんは、私達がそう感じておりますように英国聖公会に親しみに溢れた友情をお持ちであると信じております。

いまこの場所に立っておりますとき、本日ここに列席されている二人の主教の父であり、長い間、日本聖公会の首座主教をされていた八代斌助主教のことを思いうかべます。神戸市およびその周辺地域のための宣教の中心として、この大聖堂建設を初めに思いつかれたのは八代斌助主教でした。私は八代主教の多方面にわたる働きを存じております。多くの教育機関との関係、そして、そのいくつかは主教自身が創設されたものであります。また神学教育に対する深い関心、さらには、説教台あるいは文書を通してのキリスト教福音を宣べ伝えようとされた熱意、そういったこと全てを思い出しております。

明年、世界の全ての地域から、主教たちが私の町でありますカンタベリーに集まりまして、次のランベス会議を開催することになりますが、戦後の占領期間中、最初の日本人として海外渡航を許され、1948年のランベス会議に出席された八代主教と他の二人の主教さんのことを思い出します。

また八代主教のお父さんである八代欽之允司祭を通して、私達英国は、日

本聖公会の揺籃期その初期の時代に結びつけられております。と申しますのは、八代欽之允司祭は、1886年に英国の宣教師でありましたジョン・パチェラー司祭から受洗され、のちには自ら司祭となって活躍し、また多くの人に愛されたわけであります。この大聖堂が私の前任者であるフィッシャー大主教によって聖別されたということを考えますときに、私達とこの聖ミカエル大聖堂および日本聖公会との結びつきの強さというものを感じ、そのゆえに神様に感謝したいと思います。

さて、話題を過去から現在に移したいと思います。先ほど聖書の箇所が二箇所引用されましたが、この聖書の言葉から私達は何を理解すべきでありましょうか。数年前に英国で聖パウロの生涯を題材にした演劇が上演されました。劇の標題は「二つの世界に属する人」となっておりましたが、この標題は、私達が読んだ使徒書に相応しいと思います。

このペテロの書簡は、宗教的に少数者であると感じている人々にあてられたものであります。これらの初代のクリスチャンたちは、外国人として他の国に住む人のように、自分たちの特権よりも、義務に気をつかわざるをえない人々でありました。彼らの住む土地の精神的基盤は、彼らにとって馴染みのないものでありまして、彼らの価値感はその土地の人々の価値感と大変に違うものでありまして。

他国に住む外国人、敵意に満ちた異国に住む外来者、そういった人々の気持ちを十分に理解しうるクリスチャンは、今日世界の多くの場所で見出すことができるでありましょう。初代教会の最初の数世紀の間、同じような状態が続きました。ローマ帝国内の全ての都市に、他の教会から隔てられた小さな群れが存在していました。ユダヤ人のように、周辺の世界との相違感を感じていたばかりでなく、周囲の人々からも特殊な人々とみなされ、そのために嫌悪された人々がいたわけであります。

外国人である、故郷から離れて住んでいるという気持ちは、キリスト者として私達すべてが持つ感覚であります。キリストにおいては私達は、新しい見方から、生命、人生を見るようになりました。キリストは、私達に新しい価値観、すなわち失敗や損失に対する普通の人が持っているのとは違う態度、死に対する独特の態度、そういったものを与えてくれます。私達は旅の途上にある巡礼者であることを悟られます。ヘブル書の著者は、アブラハムについてふれ、彼は、他国にいるように住みながら『揺るがぬ土台の上に立てられた都を、待ち望んでいたのであった。その都をもくろみ、また建てたのは神である』と語っております。

このヘブル書の意味することは、私達もその住んでいる世界の標準、態度、考え方などに過ぎてはならないということであります。私達が歩いておるときに、風をうしろから受けているときは、風がどれくらい強く吹いているかよく分かりませんが向きを変えて、風に逆らって歩めば、風の強さをはっきりとかんじとります。キリスト者として私達は、社会の一般的傾向に抗して歩むでありましょう。例えば、私達が最も大事だと思うものへの忠誠心、あるいは価値の標準、他の人々が当然だと考える社会通念、あるいは前提、そういったものに対して歩むといったことがありうるわけです。キリスト者であることは、かねての使い方、性的関係の問題、貧困者や社会の落ちこぼれた人々に対して、私達がどのように関わるかといった面で、特別な態度をとることを意味します。

しかし、キリスト者は自分の住む社会の存続に無関心でいる派閥（特殊なグループ）であってはなりません。聖パウロは、ピリピの人々に、私達の国籍は天にあると語りましたが、この言葉は、ピリピの人々がこの世と無関係であってよいと云っているのではありません。聖ペテロは読者にそれぞれが住んでいるところの人々、彼らクリスチャンに敵意を抱く人々、権威をもつ人々に対する責任について語っているのであります。

キリスト者はまさしく、一つの世界に住んでおり、聖ペテロはそれぞれの世界の価値を認めるように勧告したのであります。彼ら同様私達も、主イエス・キリストに栄光を帰し、人々を主に魅力ある方とさせるように人生を生きる必要があります。かつて私は、ある人が宣教師に対して「キリストを魅力のない方にするようなことはするな。ただ行動しなさい」と語ったのを聞いたことがあります。

聖ペテロは、私達が自由な男また女として生きることを強調しております。しかし私達の自由は、神様のしもべとして生き、すべての人にあい相応しい敬意を表わすという恐るべき責任を伴います。神様が働いたもう場所は教会に限定されないということを私達は忘れてはなりません。神様の愛は、私達が考えているより遙かに広く、私達は、人間生活すべての場で働かれる聖霊を識別する必要があります。私達はそれぞれの町と国に、個人および個人生活を変革するよきおとずれをもたらす責任があります。

あなたがた神戸の人々は、過去30年の間ブームを見てこられました。大量の輸出物を積んだ船が港を出て行くのをごらんになられたし、皆さんの生活水準が驚くべき上昇を遂げたのもご存じでしょう。そういったことに対して、神様に感謝するのは当然のことです。しかしキリスト者として『人はパンだけで生きるものではない』ことを皆さんは知っておられます。あなたがたの言葉は、あなたがたの社会と国家にとって預言者的な言葉であるはずです。

しかし皆さんは云われるかもしれません。圧倒的多数の非キリスト者に対して、僅かの数のキリスト者になにが出来るか。キリスト者は、キリストの召命にどうしたら応えられるのか。そういった問いを問われるかもしれません。しかし、さきほど読まれました福音書の中の弟子たちが、キリストに去られて空しさを感じたように、しかし、それで確信を失わなかったように、皆さんも空しさをときには感じて、確信を持ちえと私は信じます。私達

も、神様がはるか遠くかなたに隠れられて、私達の語る言葉に力も光もないように感じる空しいときを、ときには経験することがあります。

しかし福音書は、この私達の感じます空しさ、空虚さ、あるいは損失の感覚、そういったものが最終的なものではないことを記しております。主イエスは、私達とともにいたもうことを保証されます。マタイ伝福音書には、主イエスは弟子たちに宣教の働きをお命じになったあとで、『見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいるのである』と約束されました。主イエスは、聖霊がひきつづき弟子たちとともにおり、すべての真理に導かれ、ご自身を指し示すようにされ、私達が祈るときにはいつも私達に会われることを約束されたのであります。

キリストがこのようにお約束下さったからこそ、今朝私達はこの聖餐式に列しているのであります。キリストは私達とともにおられます。パンとぶどう酒が指し示すご自身を、キリストは私達にお与え下さいます。パンとぶどう酒は、キリストの死のしるしであり、その死はキリストがすべてをお与えになり、いまなお与えつづけられていることを示しております。私達はパンとぶどう酒を受け、キリストにあってひとつとされ、新しく奉仕のわざに努めることを命じられます。『あなた方が受けたように、与えなさい』という命令を、私達はいただくのであります。

福音書がまだ記されない前に、記録された主イエス最初のみ言葉は、聖パウロの説教の中で引用されております。すなわち『受けるよりは、与える方が幸いである』というみ言葉であります。これは奇妙な言葉ですが、私達が真のキリスト者といわれる人々を見るときには納得させられる言葉であります。たとえば、カルカットでお会いいたしましたマザー・テレサ、ケープタウンでお会いしたデズモンド・ツツ大主教、また英国で、ガンで苦しむ子どもたちのために奉仕をする修道女の方々、そういう方々を思い出すときに理

解できる言葉であります。これらの人々はすべて、ひったくる人々ではなくて与える人々であります。

おわりに、皆さんの大聖堂が、大天使聖ミカエルを祈念する聖堂であることにふれたいと思います。旧約聖書のダニエル書には、ミエカルはイスラエルの守護天使として描かれております。ミカエルという名は、神とともにある力を意味します。しかしこの力は、私たちが誇りにするために与えられたものではありません。それは、神様が私達にお与えになった力であります。私達が前方に横たわる障害、挑戦者に直面し、神様のお与えになる使命を果たしえるのは、この神様のお与えになる力によってであります。

英国のコベントリー大聖堂も、聖ミカエルを記念して建てられた聖堂であります。その建物の外側に、有名な彫刻家ジェーコブ・エプスタインによる巨大な聖ミカエルの像があります。その像は、聖ミカエルの悪魔に対する勝利を描いていますが、それは聖ミカエルが、神様のためにすべての悪の力と戦うことを使命として与えられたことを示しております。それこそは、私達に与えられた使命でもあります。神が永遠の御子によって与えられる力を受けて強くある、それが私達に与えられた使命であります。

キリストの力において、絶望は希望に、疑いは信仰に、弱さは強さに変わります。それなればこそ私達も聖パウロとともに、私を強くして下さる方によって、何事でもすることが出来ると云えるのであります。これは、この聖ミカエルの名をもつ大聖堂で礼拝するすべての人々にとって素晴らしい標題であると思います。どうか皆さんの上に、神様の豊かな祝福があることをお祈りいたします。アーメン。

(訳・八代崇主教)